雛の館－資料２

御殿飾り（竹谷義一家蔵）

当家の蔵奥深きところより収納箱が発見。その中に組み立て式の御殿と芥子雛があった。内裏雛は男雛１１ｃｍ女雛１０ｃｍと小さく、本来五人官女であったが、二躰の頭が惜しくも朽ち、三人官女となった。９ｃｍ～１０ｃｍの官女で、いずれも可憐な芥子雛である。御殿は痛みがあり今春補修された。

御所人形（細谷正二家蔵）

江戸時代、御所から拝領された人形を「白肉人形」「白菊人形」「大内人形」等と称していた。明治以降「御所人形」と呼称されたといわれている。本品は三頭身の童子で、最も美しく気品に溢れ典型的な御所人形である。目が細いほど古様とされている。見立て「天下人」と「浦島太郎」である。共に４０ｃｍ余り。

有職雛（高倉雛）（逸見義一家蔵）

公家の「ひひな遊び」から端を発し、江戸中期（1750～）に有職故実による装束を雛用に織り着けた、これを通称「有職」と称している。衿元の結び目に糸かがりで「X」とあるものを高倉雛と言う。男雛は狩衣を着用し２７ｃｍ。女雛は桂袴を着用し２４ｃｍの高さ。容姿から見て江戸後期のものと推察される。

古今雛（高橋長作家蔵）

江戸上野の池の端に住む大槌屋が、原舟月に頭を彫らせ、新しい型の雛を考案したのが「古今雛」と称している。本品は頭は木彫胡粉仕上げで、容姿は古様式をしており、京都製の古今雛と思われる。装束は共裂地で質素ながら気品がある。男雛は３０ｃｍ、女雛は２６ｃｍ。

五人囃子（竹谷義一家蔵）

文政年間（1818～）に流行した芥子雛の一つである。装束は紅縮緬に金糸で刺繍をほどこした小袖に、深緑地に亀甲梅鉢絞の素襖を着している。打楽器の２躰は１０ｃｍ外の３躰は８ｃｍで華麗な面立ちと優雅な容貌をしている。箱書も同時代の墨書。

古今雛（高橋熙家蔵）

古今雛は明和（1764～）頃、上野池の端の大槌屋が

雛の館－資料２

考案した新型の雛が生まれ、以来この手の雛が主流となる。幕末になると雛の技法が改良され、目に水晶やガラスを用い、より美しい玉眼となる。本品は明治初期の作品で、男雛が３７ｃｍ、女雛は２５ｃｍ。

隨身（槙 孝弘家蔵）

隨身は、内裏雛の添え雛として、すでに明和（1764～72）年間に京都でつくられていたと言われている。本品は頭と冠が一木造りの彫刻で珍しい。掌に弓の弦を通す穴があり、写真のような姿となっている。身丈は３２ｃｍと大振りで、隨身の初期的なものと思われ貴重なものである。

古今雛（林重見家蔵）

江戸で新型の雛「古今雛」が急速な人気を博した。これに伴って京都でも古今雛が生まれる。本品はその一つで頭や手が木彫で明和期に近い作品であろうと思われる。男雛１２ｃｍ、女雛１１ｃｍとなっている。

五人囃子（槙 孝弘家蔵）

京都では隨身。江戸では五人囃子が生まれる、明和（1770 代）の後に造られたと言われている。それぞれの丸顔の童顔は微笑ましく、楽しい表情をして人の心をとらえてやまない。古風な容姿、素襖の車絞様の織で統一された裂地も古く、初期的な五人囃子と思われる。（鼓役は３４ｃｍ、外は２８ｃｍ）

古今雛（五十嵐栄子家蔵）

本品は、装束の裂地や容姿からみて、大正期の作品と思われる。男雛は錦地の束帯を着し、冠纓を含めて４３ｃｍで、女雛は十二単、単の端袖の刺繍は「祝花篭」の縫いとなっている。

立雛　（河北町所蔵）

雛人形の源流は、信仰から生まれた「形代」に始まる。更に「形代」から「あまがつ」と「ほうこ」へと発達し、次に立雛が室町期以降に生まれてくる。江戸初期迄つづき、座雛が生まれてから減少。江戸後期に再び立雛が好まれるようになる。本品は江戸後期の作で、厚地に裂地を貼り紋様を胡粉で置いたものである。(男雛２５ｃｍ、女雛２０ｃｍ)